詠む広場

毎日俳壇

小川　軽舟　選

北壁は人を拒みて山眠る
見附市　岡村　文子

△評▽有名なところではアルプスのアイガー北壁。多くの遭難者を出した岩壁をそそり立たせて深く眠る山に、近寄りがたい威厳がある。

見ゆる風聞こゆる風や春を待つ
常陸太田市　舘　健一郎

△評▽もがり笛を発して吹きつける風。見ゆる、聞こゆるとたたみかけて、春はまだ遠いと思わせる。

猪よけの電気柵越え蝶来たる
仙台市　古谷　隆男

寒鯉の襤褸の影を引いてゆく
福岡市　松尾　ねこ

づぶと踏む泥に春日を眩しめり
東広島市　福岡　宏

石蕗採り荒縄足に結へつけ
東　京　山口　治子

ふところに入れてやりたし寒雀
岸和田市　妙中　正

山峡に氷切りだす鋸の音
羽生市　岡村　実

病棟の夜の静けさや春近し
防府市　倉重　遥代

雪残る金剛山に朝日かな
橿原市　松田まこと

西村　和子　選

元気ならそれだけでよいチューリップ
岐阜市　山上　秋恵

△評▽チューリップは子どもが最初に描く、色も形も単純な花。幸せとは、親の願いとは、単純明快に表現した作品である。

薬包紙嘘ごと丸め春寒し
下野市　石井　光

△評▽周囲を心配させまいとするためか、自分をなだめるためか。どんなウソかを季語が語っている。

あげたてのドーナツ匂う春の夕
宍粟市　宗平　圭司

春つかむつたい歩きの小さい手
東　京　青木　公正

春泥や何とか跨ぐ一歳児
須崎市　野中　泰佑

猫のゐる町住みやすいぬふぐり
加古川市　伏見　昌子

肩先も指先も風邪癒えにけり
東　京　望月　清彦

曇天の剝がれて落つる牡丹雪
横浜市　菅沼　葉二

卒業子廃校となる門を出づ
大　阪　池田　壽夫

なかなかに動かぬ沖の船うらら
香芝市　山本　合一

井上　康明　選

雪深くして山彦も眠りしか
唐津市　梶山　守

△評▽山々は、深い雪に覆われ、しんと静まり返っている。夏に声を響かせた山びこも、眠ってしまったのだろうか。

鳥曇退職の友ふるさとへ
東　京　小栗しづゑ

△評▽退職し故郷へ帰る友との別れ。頭上には、渡り鳥が北へ帰るころの曇り空が広がっている。

先発の投手は少女風光る
伊勢市　古野　政木

春光の十字路はばたくばかりなり
相模原市　小山　鞠子

茂吉忌の厚いベーコンエッグかな
東　京　野上　卓

昼休みのドッジボールや山笑ふ
尼崎市　森下久美子

生れたる子牛記号で記さるる
倉敷市　中路　修平

どの山も春の風吹く甲子雄の忌
高松市　島田　章平

美しく討たれしごとく椿落つ
東　京　山口　治子

白梅の湖畔小枝を踏みてゆく
甲府市　清水　輝子

片山由美子　選

初蝶の小さき風に乗りにけり
野田市　塩野谷慎吾

△評▽春の使者のような初蝶が、ひそやかに風に吹かれてきたのである。小さなチョウであることが「小さき風に乗り」でわかる。

針箱にあふるる釦百千鳥
加古川市　伏見　昌子

△評▽色とりどりのボタンがたまっているのだろう。季語の百千鳥の声と響き合う取り合わせだ。

二日目のカレーのこくや春の昼
狭山市　小俣　友里

春宵のゆっくり溶けるチョコレート
清瀬市　桃瀬菜美子

ポケットの多き冬服脱ぎにけり
大阪市　福永　都女

ホワイエのシャンペンコーナー春の宵
東　京　渡邊　顯

百年の家の軒端の古巣かな
江津市　高橋　猛

靴紐を結び直すや犬ふぐり
姫路市　三木　崇弘

つちふるや骨董市に唐三彩
川口市　渡辺しゅういち

パン屋の灯一つ小さく街おぼろ
鹿児島市　平川　玲子

ことばの五感

白い花を咲かせて

川野里子

・生きるとはこのやうにリボンつけることとリボンのうれしさ焼け残る服
川野里子
（歌集『ウォーターリリー』）

柔らかい光の中でモノクロ写真の女生徒たちがまっすぐにこちらを見て微笑む。入り口で見たその笑顔の力強さを思いながら広い展示室を歩いてゆく。すると、突然床に白いものが散らばっていた。白いものはたくさんのティッシュで、その真ん中に制服姿の少女が蹲っていた。どうやら嘔吐してしまったらしい。

ここは広島の平和記念資料館で、被爆した人の焼け爛れた背中の写真の前だった。大人なら何らかのバリアーで心を覆うものを、少女は剝き出しの感性で向き合ってしまったのだ。散らかったティッシュを片付けようと藻掻く彼女を係員が留め、介抱していた女性教諭が出口に連れ出そうとしている。私は目を逸らそうとした。その時だった。少女は教諭の肩に摑まりながら立ち上がり、ゆっくりと再び壁の写真に近づいていった。そして見始めたのだ。火傷した人の背中の写真を。

私はその後ろ姿に圧倒されながら、彼女と火傷した人の背中をともに見た。散らばるティッシュが白い大輪の花のように咲いている。私はさっき入り口で見たモノクロ写真の女生徒たちの澄み透るような眼差しの強さを思い出していた。それは原爆投下以前に撮られた写真だった。私たちが知ることのない世界の人の笑顔。その眼差しと、今、被爆した人の背に向き合う少女の眼差しとが重なった。

（かわの・さとこ＝歌人）

＝「ことばの五感」は今回で終わります。